

29 小夜中山と今川氏三回の攻防戦

筆 者 岡本 春一

今川氏の台頭

今川氏は室町幕府を開いた足利氏の一族です。今川氏は鎌倉時代の中頃三河の国今川荘を支配します。この事から地名を取って「今川氏」を名乗ります。そして足利氏と同族の今川範国の時代になると、順次勢力を伸ばすと共に足利尊氏の配下の重鎮となって、各地の合戦に加わり勝利を納めます。こうした功績が認められて、足利尊氏は初代今川範国を重く用います。そして駿河の国並びに遠江国の守護大名に任命して、両国への足掛かりを掴み基礎を固めて行きます。

小夜の中山は古来鎌倉街道の主要道路です。東は大井川を挟んで駿河の国となり、西は遠江国となります。しかし遠江国は斯波氏の勢力範囲で有った事から、両国の守護大名は境界点である小夜の中山を中心に度々戦場となります。そして此の地域は戦場としては誠に好都合な場所でもあった。特に海老名砦の様な谷の迫った所は、地形を上手く使って狙い撃ちをするには絶好の地であります。弓矢が届く有効距離の地域として戦の時は度々活用されていました。

その証拠となる海老名砦周辺の畑に夥しい五輪塔(雑兵でなくそれ相当の武将の墓)が、耕地整理で山と積まれている所を見ても之を証明する事が出来ます。詳細は後述、従ってこの弓矢の時代に国取り合戦に勝った方が地域を制覇し、守護大名としての力量が発揮されます。こうした事から今川氏は三回もこの小夜の中山で戦をする事になります。平穏な時代は都人が長い旅路で小夜中山の嶺から都である故郷を振り返り、和歌に詠まれた懐かしい場所でもありました。



建武の新政

鎌倉幕府は建久3年(1192)源頼朝が政権を握り武士の時代に入ります。そしてその権力を遺憾なく発揮して安定した政権の獲得に成功します。しかしながら時は過ぎ文永時代に入ると、国内政治は安泰したものと思わぬ事態が発生します。それは文永11年(1274)と更に弘安4年(1281)の再度に渡り、中国元軍の2度の来襲に依って、諸国の御家人を九州や京の護りに着かせます。郷土からも横地城の城主横地師長が京の護りに着いていた。戦いは幸い二度とも台風の来襲に依って勝利したが、鎌倉幕府としては莫大な戦費を費やし食料を費やします。相手が中国元軍だから、通常ならば勝てば恩賞として各武将はそれ相当の領土や恩賞を戴きます。しかし相手が中国では領土も賠償金も取れないので、幕府は全く疲弊のどん底に落とされてしまいます。

御家人である武士は疲労の極に達します。論功行賞の不手際等で不満が高まった。之を見て取った日野俊基は京で討幕の計画を着々と進めたが、事前に発覚して捕えられます。そし

て鎌倉に護送される途中に此処菊川の宿で中納言宗行卿の事を思い出し「古もかかるためしを菊川のおなじ流れに身をやしずめん」と一首を残しています。こうした難局を救うために鎌倉幕府は徳政令を出して、御家人の借金を棒引きにして急場を凌ぎます。

この一件は終わり北条高時の死を期して、副大将であつた足利尊氏は幕府に反旗を翻し、京の六波羅探題を急襲して落とし鎌倉幕府は滅亡します。

この鎌倉武家政権の衰えたのを幸いに、後醍醐天皇は天皇の新政に協力する武士を集めて、弘安3年(1333)鎌倉幕府の滅亡を幸いに「建武の新政」を断行します。然しながら計画は一応成功したものの、その論功行賞が天皇や公家の階層に厚く、一番活躍して戦功の有った武士に薄かったので、恩賞に不満を抱く武士の反感を買って、建武の新政は僅か3年で崩壊します。

第1回目中先代の乱と小夜中山、海老名砦の戦い(建武2年1335)

「建武の新政」の崩壊を見届けた北条時行は、「鎌倉幕府」を今一度復興しようと計画を建てます。後醍醐天皇の恩賞の不公平に不満を募らせた多くの、御家人や武士を味方に付けて、起こした反乱が建武2年の「中先代の乱」です。

北条時行は信濃の諏訪頼重等と挙兵し、武蔵野国で足利直義軍を破って鎌倉を占拠します。8月足利尊氏は早速軍勢を引連れて、北条時行軍を打ち破り頼重は自害し北条時行軍は逃亡して決着をします。その後足利尊氏は建武の新政に叛意を明らかにします。京に在った足利尊氏は東下の許可と征夷大將軍、総追捕使の任命を望んだが後醍醐天皇に無視されます。

足利尊氏は京を発ち弟直義と合流をして関東へ向かいます。しかし之を迎え撃つ為に北条時行軍が遠江国小夜の中山・海老名砦に陣を張って迎撃の準備を始めます。従って尊氏は5万余騎の人馬を揃えて掛川に到着します。

建武2年8月12日北条時行軍の立て籠もる、海老名砦・小夜の中山を盛んに攻撃し占領してしまいます。足利尊氏は更に北条軍の富田城・堀田城も攻めて勝利を収めます。特に海老名砦・小夜の中山の合戦では機先を制するが勝と、足利軍は精鋭の騎馬を揃え今川範国の軍と合流して、海老名砦を占領していた北条時行軍と激突して大合戦になります。

この大合戦を裏付けるものとして、海老名川左岸の海老名砦周辺には(地元の人は五輪山と呼ぶ茶畑の一角に)、中先代の乱の供養塔の五輪塔群が、茶園開拓の為に山積されています。平成12年「掛川市史中世資料編」の調査に依ると、宝篋印塔二基、五輪塔八基、一石五輪塔一八基(山積されているのでそれ以上有る)が確認されています。「小夜中山探訪記」昭和60年版では土を掻き寄せると墨書した写経石が出て来るとあります。五輪塔は兵士のものでは無く武将のものと思われるので大激戦の後が想像されます。

この戦乱には地元の原・横地・勝間田軍も連合して合戦に加わり戦功を挙げています。この戦いで北条軍の大將名越太郎を追い詰めて、之を討取った事が「今川記」にも載っています。そして北条軍の大將であつた名越太郎の霊を弔う為に、後日戦場となった小夜の中山に造られたのが「鎧塚」とであると云われています。

室町時代と足利尊氏

暦仁元年(1338)8月足利尊氏は「建武の新政」に反旗を挙げます。光明天皇を擁護して遂に征夷大將軍に任じられます。そして室町幕府を作ります。その配下にあった今川範国は室町時代最初の遠江国守護大名に任じられます。そして遠江国に勢力を拡大して行きます。遠江国に存在していた後醍醐天皇の南朝勢力の壊滅を計ろうと今川範国は取掛ります。後醍醐天皇の皇子宗長親王は天皇の命を受け、南朝勢力を伸ばす為に伊勢を出発しますが、遠州灘で台風に合わせて座礁します。そして井伊の谷城に逃れます。これを追って来たのが今川範国とその一門で、高師泰・斯波尚経・横地長連等で、犬居城を攻め落として南朝勢力を壊滅に追い込みます。この功績に依って今川範国は遠江国と合わせて駿河国の守護大名に任じられます。

第2回目海老名砦と小夜中山の戦い

正平4年(1349)足利尊氏の配下にあった弟直義は、足利尊氏を助けて諸政務を行なっていましたが、同じ重臣の高師直と争って不満を募らせます。そして弟直義は遂に足利尊氏に謀反を起こします。これを知った足利尊氏は正平6年(1351)11月弟直義を追討の為に掛川宿に到達します。海老名砦では弟直義の配下である上杉憲顕の率いる軍勢が待ち構えています。之に攻撃を掛けたのが足利尊氏の配下の今川家氏です。そして地元の面々である伊達方城主の伊達景宗・横地城主の横地長則・勝間田城主の勝間田三河守の軍勢が総力を挙げて、足利直義・上杉憲顕軍を撃破して勝利を治めます。

この海老名砦小夜中山の合戦の戦功に依って今川家氏は感状を戴きます。そして地元の伊達景宗は更に厚い恩賞に与ります。半済令に依って伊勢神宮領の山口御厨の半分を伊達景宗に与えます。之に依って伊達方村が誕生します。更に伊達氏は出陣に当たって、牛頭天王社(伊達方・本所境)に戦勝祈願を行ない、無事大願を果たしたと云う戦勝の証として、足利尊氏より牛頭天王社に黒印を戴き、牛頭村を神領とて拝領する事になります。その後天王社の鍵取りは牛頭村庄屋山崎彦左衛門家が代々之を引継いでいます。

前述の様な内乱に対しては地元より軍費を調達する為に、室町幕府は強制的に寺社領や荘園領主の管理する土地の半分を「半済令」を作って取り上げます。荘園領主は朝廷に之を訴えますが、朝廷には既にこれを取締るだけの力が無いので、地頭の領主化が進みます。従って「泣く子と地頭には勝てぬ」の言の様に荘園領主は泣き寝入りする事になって行きます。

第3回目応仁の乱と海老名砦と小夜の中山の戦い

応仁元年(1467)足利將軍家並びに管領畠山、斯波両家の相続問題に端を発した「応仁の乱」は、將軍足利義政配下の東軍細川勝元の率いる24ヶ国46万人の軍勢と、足利義視配下の西軍山名宗全の率いる20ヶ国41万人の軍勢に分かれて、都である京都を中心に激突します。之に日本諸国の大名も巻き込まれて、都を中心に大争乱となります。

この内乱は中々決着が付かず、長い戦乱で都は「汝や知る都は野辺の夕ヒバリ上がるを見ても落ちる涙は」と云われた如く、都は焼野が原と化してしまいます。此の戦乱は都だけで無く地方にも波及して来ます。

遠江国では今川義忠が東軍並びに西軍から誘いが有ったけれども、足利將軍の居る方が正統であると東軍に味方をします。西軍には遠江国守護大名斯波義廉と、配下の横地城主横地長秀、勝間田城主勝間田修理介が加わって参戦します。

文明 5 年(1473)11 月東軍の今川義忠は戦功に依って、足利義政より將軍領であった懸川莊代官職を仰せ付けられ、遠江国への足掛かりを再びつかむ事になります。そして家臣の朝比奈泰熙に東海道の要所である天王山に懸川古城を築城させます。一方西軍の斯波氏は甲斐八郎を遠江国守護代として遠江国に派遣します。配下に横地太郎、勝間田修理介を置いて守備を固めて対陣したので、当然の事ながら両者には地方に於ける戦乱が待ち構えています。

文明 7 年(1475)、今川貞延(堀越入道)軍の軍勢の侵略を知った横地、勝間田軍はこれを未然に抑えて置く必要から海老名砦に陣を張り、地の利を得たゲリラ戦で防戦します。この戦いで今川貞延軍は雇の兵士が多かったと云われ、形勢の不利から遂に攻め切れず逃亡して、横地軍に牛頭砦で追付かれます。そして防戦の手段を失った堀越入道は、将としての身を隠す為に自己の馬の鞍を鞍骨の池に投げ込み、遂に自害したと云われます。しかし鞍骨の池の伝説は鎌倉街道が牛頭村の馬の鞍(鞍骨)の部分を出越していたので、地元の人々は麓の池を鞍骨の池と呼んでいた。従って堀越入道の馬の鞍の話は後世の当てつけの話であります。伝説はロマンが有った方が良いので詮索しない方が良からう。

文明 8 年(1476)これを知った今川義忠は軍勢を整えて、久野、畠山軍 500 騎、今川義忠軍 500 騎を整え、7 月 23 日勝間田城を攻め落とし再び今川の手に戻した。この戦いで城主勝間田修理介は無残な最期を遂げます。翌年 3 月今川義忠は見付の斯波氏の狩野館も取り戻した勢いで、横地城も攻め落とし城主横地鶴寿も共に戦死して、多くの犠牲者を出し城主を失います。

この勢いに乗じて今川義忠は悠々と駿河の国へ凱旋する事になりました。しかしながら此処に一つのハプニングが起こります。軍勢を揃え悠々と昼間凱旋すれば良かったが、勝った勢いもあって一瞬の油断から、夜道を急ぎ駿河の国へ帰ろうとした為に、塩買坂まで来た所、横地・勝間田軍の残党に依って奇襲され、流れ矢に当たって逃亡し、川上の庄屋宅で手当てをしたが遂に息を引き取ったと云われます。この様に今川義忠は不本意な最期を遂げてしまいました。従って亡骸は今川一族に依って塩買坂に正林寺を建立し、開基として葬られています。